The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平安朝後期に於ける家外の經學
Author(s)	大江, 文城
Citation	懐徳. 1939, 17, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89022
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平安朝後期における家外の經學

大江文城

一

平安朝の中頃に、家學が樹立した。前に寮學に對して、寮外の學があつたやうに、家學に對して、家外の學があらはれた。家學が、家本家點家傳家說の上に、嚴重な形式を備へてゐたに對し、家外の學は、その讀方といひ、注解といひすべて自由であつた。

明經家學は、大學寮衰廢の後を承けて、一條天皇の頃に樹立したが、その後久しく勢を張ることが出來ないで、たゞ名ばかりであつた。一方家外の學は如何かといふに、こは傳統的のものでないから、入唐授受などいへば兎に角、左樣でなければ、たとひ學才があつても、之を主張し門戸を立てることは出來なかつたのである。我國の經學は、久しきに亙る因襲により、その自由を塞がられてゐた。唐儒義疏學なども、夙に傳來してゐるに拘らず、菅野佐世・善淵永貞の後に、この書について、之が研究を積んだ記錄さへ極めて稀である。たゞ平安末に至つて、藤原通憲・同賴長・等一派が挺起して、之が講究を始めたことは、たとひそれが一時的の現象であつたにせよ、王朝經學界の掉尾の一偉觀で

ある。

賴長は、藤原通憲・同成佐・源師賴を師とし、源俊通・中原師長・同師元・清原定安・同賴業・藤原友業・同孝能・同遠明・同敦任・菅原登宣等を友として、講習討論した。賴長は、その地望も高く、學問も儕輩を拔いてゐる新進の經學者であつた。賴長の周圍には、此等十數の學者が集合し、論義の席を開き、互に研究精進した。賴長は、「臺記」に、自己學問の方法を述べてゐる。當時他の人々も、同樣の往路を進んだであらう。「臺記」によると、賴長に、崇德天皇の保延二年、その十七歲の時、「蒙求」を讀んでから、近衞天皇の康治元年、二十三歲までに、讀み得たものに、經家三百六十二卷、史家三百二十六卷、雜家三百四十二卷、併せて一千三十卷に及んでゐる。その內、師說を受けたものは、經書では「毛詩」「禮記」「古文孝經」「論語」、及び「老子」の六部五十四卷、史書では、「漢書」一部九十二卷、詩文では、「文選」、並に「樂府」の二部であるが、他の多くの經書を始め、史書雜書類は、自由研究によつたものである。經書について師說といふも、明經家學の傳授ではなくて、通憲・成佐・師賴の師說である。此等は當時經學の家元であつた明經家學に存在してゐたが、博識な賴長には、甚だ物足りないものと感ぜられてゐて。「易」「周禮」「儀禮」「左氏」「公羊」「穀梁」の如きは、「臺記」に、

手自引勘疏、散不審、云々。

といつてゐるから、傳授によらないで、讀方と意義とを辯じたのである。傳授によればこそ、經書の讀方は困難であるものゝ、一旦傳授を離れた時には、家點家訓の累もなく、祕傳密符の煩もなく、自己獨自の學力見解によつて、自由に讀下し得るものである。

當時賴長、及びその同志の間に輪講されてゐた經書は、「臺記」康治二年七月二十二日條下に、「左傳」「公羊」「穀梁」「禮記」「周禮」「儀禮」「詩」「書」「周易」「論語」「孝經」の順序によつて、毎子(ネノ)日(ヒ)に講師を開いた。賴長は、此等の經書を講究するに、參考書として併讀したものは、「五經正義」「公羊解徵」(公羊疏は傳來無し)「穀梁疏」「論語皇疏」「孝經述義」の類であつた。「五經正義」等は、「日本國記在書目錄」に、已に著錄されてゐるが、此頃に至り新に摺本が傳來し、學者は之を珍重すること限なく、爲に相競うて之を讀まうとしたのであらう。賴長なども、此等の書を耽讀した記事が「臺記」の處々に散見してゐる。もし他の公卿學士が、學事に關する日記を殘したなら、皆之に類する努力をしてゐたことがわかるのである。「臺記」康治二年七月十三日、「春秋三傳」について、その注本と疏本とを比照精讀したことが記されてある。當時の學者の、研究に熱心な樣がうかゞはれる。その記事に、

自去十一日、自經題、盡先(元カ)年傳、三反高聲了、讀正義、初兩卷、依殊勝、重見之、學左傳事、釋例一反、初左傳一反首付、并可抄出之所、懸勾、了、以生徒令抄出了、其抄出十卷讀合本書、卽首付、次一反□(了カ)、委首付、先以成君(佐カ)、令披校摺本、予又不審之所、重校摺本、又本成君(佐カ)所作之圖、予重書入案事、次一反

高聲讀之、次見正義、引合本書、文文案義理、其正義首付、又抄書之所懸勾、其中勾、以生徒可令書本書之裏、次早一二卷讀之、公羊一反見之、畧首付、可抄所、懸勾、以生徒令抄寫、其抄出三卷讀合本書、卽首付、解徵一部十二卷見了、首付、勾要文、以生徒書本書之裏、穀梁同公羊但抄出二卷疏一部十二卷見了、畧首付、勾要文、以生徒令書本書裏、春秋三傳、隨分入功、仍記之了、

とある。唐ノ高宗の永徵四年に出來上つた「五經正義」は、經注本と別行し、單疏寫本として世に傳つてゐたが、北宋太宗の端拱元年、勅によつて始めて印行された。我國に傳來した摺本は、その時のものであらう。「近聞偶筆」に、經疏別行を說いて、

唐孔賈諸先儒、作諸經義疏、皆別行、其卷數見唐藝文志、可攷而徵也、

とある。「臺記」「山槐記」「百錬抄」等によると、「五經正義」の外に「周禮疏」「文選」「白氏文集」「新定之禮圖」「經典釋文」及び浩澣な「太平御覽」等の摺本も傳來してゐたのである。當時の學者が、經書の研究は、經注本を本とし、之を疏本に比照し、高讀、首付、抄出、裏書等の方法によつた。學者仲間で每々行はれる論義の下準備には、互に怠りなく疏本などにより準備したものである。問者からの質問が可なり難問であつた爲に、この細心な注意と熱心な研究とを要したのである。

二

賴長は、平安末期における最も傑出した經學研究者であつた。大學寮における釋奠論義、もしくは

殿上における內論義の形式を、自家講習の上に移して、家論義と云つたことが、「臺記」に見えてある。講師問者等は、交互にその役を勤め、經義を論究することにした。康治二年十二月十八日には、「禮記」の論義を行つたが、此時始めて論義の方式を定めたのである。「臺記」その條下に、

講禮記、今度有儀禮、禮記一部、置文宣王御前、後可倣之、講師成佐、問者俊通、先例問一部內事人別問一事、今度凡議定二卷、今度第五六豫被仰講師問者、又人別問二事、問答不異僧但不引聲後可倣之、先例問者二人、今夜所在、俊通•實長•余也、實長及余、成佐弟子也、仍俊通一人問之、不可爲例、事了、講師問者、出論義、依有遲怠、今度有議、以實長爲注記、論義間書之、後可倣之、今夜論義、一、月令誰作哉、一、文王世子篇稱文王如何、詩三首獻如例、

とある。每回二卷と定め、問者は人別に二事を問ふことにした。此等は釋奠の時、論義もしくは內論義の時の如く、可なり骨が折れ、學者の研究をたすけたことも多大であつたであらう。近衞天皇の天養元年六月十三日、「左傳」の論義の時の如きは、講者淸原定安の不覺を傳へてゐる。「臺記」その條下に、

定安答旨、甚以不覺、成佐問一條、不全答、滿座含咲、說法一口、又不足言、委旨見記錄、

とある。定安は、明經家學中の人である。當時の論義は、自由討究により、狹小な家學の範圍に束縛されたものではない。從つて定安は、問者の問に答へることが出來なかつた。その十二月廿四日定安

は、大學に至り、「五經正義」「公羊解徵」「穀梁傳疏」「論語皇疏」「孝經述義」等を披覽してゐることが、「臺記」のその條に見えてある。明經家も論義の席では、義疏研究の必要を感じたのであらう。賴長は「臺記」天養二年九月二十四日條下に、明經博士信俊の學問を評して、末文を究めずとして之を斥けてゐる。末文とは、唐宋に出來た義疏のことであらう。

賴長は、毎々家論義を開いて、周圍の學者とともに、大に經義の研究に精進してゐた。賴長は「穀梁傳」により、孔子生日の庚子は、その二十一日となし、そこで天養元年八月廿一日は、恰も庚子に當り、まことに遭ひ難い日となし、此日を儒道竪義の日と定めたのである。「臺記」に、

竪義事、

以八月建酉廿一日不謂支干爲式日、是孔子生日也、公羊傳曰、十一月庚子生、穀梁傳曰十月庚子孔子生、案之、周十月卽是夏八月也、兩傳日同月異、公羊解徵、穀梁疏、不釋之、案三經、皆云、冬十月庚辰朔、日有食之、計之十月廿一日當庚子、十一月不得有庚子、但十月有閏者、十一月得有庚子矣、案杜預長曆、八月有閏、十月無閏、然則穀梁說可爲是者乎、據此說、以八月廿一日爲式日矣、今日始有此事、隨又當庚子、寔難逢之日也、先聖聊有感應歟、

とある。この日に、「春秋三傳」の論義を開き、探題竪者問者注記を定め、嚴重を極めてゐる。探題には、藤原成佐、竪者には源俊通、問者には賴長、及び藤原友業・同孝能・源實長・菅原登宣、注記

には中原師元と定められ、論義に卯刻友業の「尙書」の開講に始り、引續いて「春秋」並に「三傳」に移り、午刻に終をつげたので、今の六時間を要したのである。竪者問者の論難につき、探題は一々得畧の判を下したのである。當時問答の有樣は、佛家論義に類し、可なり辛辣なものであつたであらう。而して「問答、委細在注記、不能具記」とあつて、その竪者の問、並に探題の批判は、之を知ることが出來ないのは遺憾である。「臺記」同條下に揭げられた當日の問目は、左の如くである。

一、春秋、以一字褒貶、其義如何、○三傳作者、誰人々々乎、（以上友業）

二、變例、如詩變風變雅、其心如何、○西狩獲麟、其心如何、（以上賴長）

三、春王正月、其心如何、○桓公無王、其心如何、（以上孝能）

四、春秋制作時節如何、○左氏能禮、公羊能讖、穀梁能經、其心如何、（以上實長）

五、左氏傳第十七奥、在第十八端、其心如何、○齊人來歸衞、其心如何、（以上登宣）

三

また當時、唐儒の書なる「義疏」の傳來のみならず、宋儒「新注」の學風も追々潛入して來てゐたことは、ほゞ想像される次第である。「臺記」並に通憲の「藏書目錄」を檢するに、中に宋代の成書などを收めてゐる。之は宋商から得たものであらう。「太平御覽」、及び「孟子音義」「三禮圖」「宋韵」「許氏音辨」などがある。殊に通憲は、宋音に通じ、宋話を解したこと、「平治物語」に見えてゐる

が、此等は、宋代の新思潮に對し、少からず憧憬してゐたためであらう。此等は新注學傳來の證據にはならないが、宋代における一脈の思想を傳へ得たものと見ることが出來る。

通憲の徒賴長は、學問愛好の人で、宋書もしくは摺本を、百方訪求してゐたが、新注書と思はれるものは、まだ入手してゐまいやうである。但し「臺記」康治二年九月條下に、

十二日乙丑、又見檀弓上、是檀弓上下學記中庸、重可見也、爲殊勝之卷故也、云々、

十五日戊辰、中庸見了、始見三禮圖新定三禮圖也

とあるのは、たしかに程子の「中庸」抽出の影響を受けたためであらう。康治二年は、南宋高宗の紹興十三年に當り、朱子が「學章章句」の序の出來た淳熙十六年に先つこと、四十七年である。中庸篇を推稱したのは、賴長のみでなく、その同輩明經家淸原賴業にも、同樣のことがある。賴業は「禮記」を讀み、特にその中庸篇を尊重したことは、家本の禮記の中庸篇の後に記した言に、

久壽二年五月十一日午刻、以或本並正義見合畢、此篇非唯盡一部之奧旨、又是足諸經之要道耳、

とある。久壽二年は、近衞天皇の時の年號であつて、賴長の康治二年よりは、十三年後である。

一體「中庸」は、「禮記」の一篇名である。賴長も賴業も、「禮記」によつて中庸篇を見たので、まだ單行本を見たのではない。康治二年の頃は、二程子は逝いて年所を經、その門下の高足なる劉質夫・李端・昌與叔・楊龜山・謝上蔡・游廣平の人々も歿し、近きも數年、遠きは數十年を經過してゐる。

朱子の父韋齋の歿年に相當し、朱子は十四歳である。「中庸」は、「禮記」の一篇名であるが、また古くから單行してゐたものと見え、「漢志」に、「中庸說」二篇を著錄し、「孔叢子」には、子思が「中庸」四十九篇を作つたことが見え、顏師古は「禮記」の中に收められてある中庸篇は、禮經でないから、恐らくは四十九篇の中の一つであらうといつてゐる。「隋志」以下、「中庸」の注解とおもはれるものが、多く著錄されてある。その朱子以前に屬する主なるものを揭げると、

戴顒禮記中庸傳　二卷（隋志）
梁武帝中庸講疏　一卷（同）
私記制旨中庸義　五卷（同）
胡瑗中庸義　一卷（宋志）
喬執中中庸義　一卷（同）
陳襄中庸講義　一卷（陳古靈集）
昌大臨中庸解　一卷（二程全書）
昌大臨中庸後解　一卷（宋志）
游酢中庸講義　五卷（同）
楊時中庸解　一卷（同）

張九成中庸說　六卷　（同　）

などである。宋人は操守を重んじ、議論に長じ、經學において、舊套を脫して、新なる機運に向つてゐる。從つて中庸篇を「禮記」の中に見出し、天理心性の學として、之を尙ぶ風があつた。宋初胡瑗・陳襄先づ之を究め、二程も亦道學傳授の書として之を崇んでゐる。賴長や賴業などが、「禮記」を讀んで、特に中庸篇を尊んだことは已に宋代學風に觸れる所があつたのである。